

外務省記録抜萃

五



第十類	五册	手四架	函

国立公文書館

分類

2 A

33-9

排架番号

1117

1117

外務省記録館蔵

左院蔵書

大森官記録

内史文庫

外国人関係訴訟事務司法省取扱一件

未開港場繫泊船一件

藏書

外國人關係訴訟事務司法省取

明治四年辛未西曆一千八百七

卯大魚六等出仕

辨事局

明治六年十二月十五日

寺島外務御殿

大木司法卿

御國人ヨリ外國人ニ對シテ訴訟其領事廳之
裁判ニ不服之節ハ其本國裁判所ハ上告致候事

ニ相成入費多クニテ薄力之者難決ノ事情モ有
之ニ付此程口頭ニテ及御問合候處領事ノ裁判

外
文
庫

不服之者ハ其國公使ハ控告致不苦昔御答有之候
 候家石者各國公使ハ御談判御決皮相成候儀ニ
 有少款先頃申神奈川表各國領事廳ニテ裁判有
 之候内伊太利ハ本國裁判所米國者サンフラニ
 申開候儀ニ承込候儀ニ有之候ニ付為念今一應
 及御問合候將又各國共公使ハ上告致候様御引
 合濟ニ候ハ、右手續等夫ニ致承知度此段及御
 掛合候也

明治六年十二月十五日

印寺島卿 印 大申宮 魚山本 六五 等出大 仕仕 並 辦事局

明治七年一月七日

大木司法御殿 寺島外務卿

御國人ヨリ外國人ニ對シタル訴訟之義ニ付云
 御問合之趣承知イタニ候右者是迄原告人ヨ
 リ其地方知事縣令或者裁判所アル地方者其裁
 判所長官ハ訴出夫ヨリ被告人之領事ハ掛合若
 領事ニ於テ裁判致シ其段我其筋之長官ニ掛合

原告人領事之裁判不服ニ候ハ、其地方官裁判
所并ヨリ司法省へ上告ニ尚貴省ニ於テ御再糾
之上原告人申立相違ナケレハ其旨當省ヲ經由
レテ其國公使へ及掛合云、當省へ申出外務卿
ヨリ公使へ及掛合公使於テモ不同意ニ候ハ、
其國政府へ可及掛合手續ニ有之候間此段御承
知有之度候也

明治六年一月七日

未開港場繫泊船一件

自明治二己巳年西曆千八百六十九年

至同 三庚午年同 千八百七十年

己十月七日達ス

一各國公使エ之書翰

以手紙致啓上候然者外國商船我國之開カサ
ル港ニ到リ且品物賣買致ス事之嚴禁タル趣
ハ既ニ條約面ニモ掲載セル通ニ候處迄未度
ニ此禁ヲ犯シ候者有之甚以不都合之次第ニ

候右者全昨辰年中兵馬草卒之際百事取締行
届蕪候ヨリ之流弊ニテ先日申ヨリ徃々不閑
港地ニ差越候者有之候ニ付此度改テ取締口
最重申付置候訖テハ此後萬一不閑港場ニ參
リ候船先賣買イタニ候品物者其場ニ於テ取
押取段及御掛合候ハ、條約面ニ從ヒ罰ニ方
御申付可有之者申造ニ無之若ニ其場ニ於テ
不取押候共後日其確證ヲ得ルニ於テ者既ニ
不閑港場ニ於テ賣買セル罪有之候義ニ付是
又相當之罰御申付有之義ト存候右者此節改

テ貴國商人工御布告有之度此段兼テ得御意
度如此御座候以上

明治二年己巳十月七日

寺島外務大輔

澤外務卿

英佛米字蘭

公使

姓名閣下

前同文言

宮本權少丞

馬渡少丞

町田大丞

公使在留無之

各國岡士

貫下

已十月廿九日差越

英國公使ヨリ之返翰

翻譯文

本月七日附之御書翰落手致候貴政府ニ者
 外國船不開港場ニテ交易不相成候處其禁ヲ
 犯スラ差苗且其外國人並其船條約面ニ右孫
 之違背致候節ハ其筋ニ相當之訴可致御決
 定之趣致承知候然者貴政府右之御決定無時
 踏英國人民ニ布令可致候就テハ日才在苗英
 國公使其權之及候處迄ハ條約面ニ揭示スル
 箇條實以為相行候間御信用可被成候右之箇
 條者

日才之開ナル港ニテ密賣買ヲナスハ勿論

其仕組有貌利太尼巫船ハ其品ヲ日本役所
ニ取上之上に犯セル毎ニ千弗之過料ヲ納ム

ハレ
ハ俟何レノ國又誰人之為ニテモ此禁ヲ犯ツ
セ候様之事無之右箇條ヲ實ニ行セ候ハ貴政
將ノ管係スル鬼ニ有之候左様ニ無之候テハ
右犯禁之沙汰ニ及候節以前許容之庶ヲ頼ト
レ可申立候岡士戈判決定ノ上ニ差響キ候事
有之候モ難斗候閣下御申越候躰ノ密買日本
之士官人者人民之内ニテ兼知之上テラテハ

イタレ兼候事ニ候間日本人不開港場ニ於テ
交易ノ為外國人ヲ招キ候事ヲ制禁ノ處置如
何ニ候哉相伺申度候右之趣可得御意如此御
世候以上

十月廿七日

大貌利太尼巫特派

全權公使

マアハルリーパークス

澤後三位清原宣嘉

閣下

午二月

外務省

御中

民部省

御國船工外國人便乘之儀ニ付此程及御掛合候
奥閑港場ヨリ閑港場工之儀ニ候ハ、其國岡士
奥印之証書ヲ以願出候ニ於テハ免許状ヲ與ヘ
候方可然且當省見込之趣申入候様御申越之趣
承知イタシ候右者閑港場ヨリ閑港場工便乘ノ
儀ニ候得者其國岡士ヨリ其旨相總候奥印之証

書為差出候上免許状相渡着港之上有免許状ハ
其港運上可工為差出候ハ、不都合之儀ニ有之
間敷候間猶又申進候否御答有之度候也

午三月

午三月四日

民部省御中

外務省

御國船工外國人便乘之儀ニ付規則振此程及御
打合置候処御同論之趣ニ付御見込之趣ヲ以
各開港場工可及布告候此段御回答旁申進候也

丁國

外務省記録 十九

左院

俄國

伊太利國

傳信機曾盟

丁抹國

傳信機約定書類

伊太利國傳信機會盟

自明治三年庚午十二月廿二日至五年壬申

辛未六月九日達

丁林復任公使工之返翰

千八百七十一年第七月十四日附第四十四號貴

簡落手致披見候然者今般澳地利之書記ガラ一

フベヒスト氏ヨリカリリス氏工贈書之趣ヲ以

テ出會可致旨繕々御来諭之際々逐一致了知候

右者澳地利公使ヨリニ懸ニ来報有之意ヨリ望

五

ム所ニ候得者官員出席可為致積ニ候ヘトモ本
國ヨリ相發ニ候テハ時期ニ可後懸念ニ付龍敕
在番我少辨務使附權大記塩田篤信工特例辨務
使加千スレペレヤルコヲ命ニ右出會之儀委任申
遺候間同人出會之上ハ相當之御接遇被下候様
閣下ヨリ其筋へ御書送被下度御依頼申候此段
回答可得御意如此御坐候以上

明治四年辛未六月五日

澤外務卿

丁抹兼任公使

フアニテルフォーベン

閣下

權大記鹽田篤信

今般フロレニズ於而傳信穢會盟有之候ニ付為
特例辨務使出會致スヘク候事

明治四年辛未六月

外務卿澤宜嘉

丁抹國傳信棧約定書類

屬魯國往復

自明治三年庚午四月十八日同四年辛未七月

レベリヤオリエニクイル支那日本ニ通信スル

為日本開港場工傳信棧之海底線ヲ着岸セシム

ル免許状ヲ日本皇帝政府エ丁抹之會社テトス

トレノルビユスケレオグジヤハンエキス

テニレヨシテレグラマカブト但支那北國

傳信棧弘ヨリ顯立ノ下稿祖右丁抹會社元希ハ

ニテ有之且倫敦部ニ出
右所構イタリ居リ候

第一條

日本政府ニ於テレバリヤオリエニタール支那
天竺日本之國々ヲ通信スル為海峽線取建之御
免許ヲ右會社オデト、ビスヤトハリエノルビユ
テレカラフ中エ御允諾可被下候事

右之為是逆関港相成居候都テ之場所則長崎大
坂兵庫横濱箱館先己未関港可相成他之場所エ
モ海峽線ヲ着岸セシムル御免許ヲ御許渡可有
之候事

會社ニ而右港ヲ別々之線ニ而通信スル勝手タ
ルヘキ事

右業務之為入用之道具先人數ヲ以入用丈ケ之
傳信機繼立場ヲ取設ル事勝手タルヘキ事

若何レ之港ニ而モ滞泊場ニ近寄ル事六ヶ敷候
歟或ハ惣ニテ非常之差支アリテ無撓節者陸地
傳信機之介ヲ取設ル事勝手タルヘク候モ右ハ
全ク線陸揚丈ケ之處陸地傳信相通ニ候ノミ之
義ニ付其海峽線着岸之所ヨリ市街役所迄陸續
セシムンカ為ニ有之候

右會社ニ而傳信機建物ニ付入用之地所ヲ買ヒ
入者依ル事ヲ望ム時者右懸合ヲ容易ニセシカ
為ニ日本政府ニ而御周旋可有之事

第三條

傳信機繼立場管轄人或者右手代ヨリ日本掛リ
役人ニ證書ヲ以テ申立タル右會社附屬之惣器
械道具并傳信機ニ相用ニ候都而諸類之品物者
日本諸國ニ於テ入港之稅并如何様ナル稅ニテ
免不絶無稅ニ而輸入イタニ度候事

第三條

今般日本

皇帝政府ニ而丁株ト日本ノ間々今逆連續ニ夕
此和親ニ對シ如之會社之大經營ヨリ日本國家
之為大益ヲ生ヌヘク右等之邊熟考アリテ右部
兩大經營ニ御周旋可有之又右會社之官員并傳
信機之為ニ用ラレハ人ニハ日本政府之保護ヲ
更ニ可受候事

右傳信機繼立場管轄人又ハ都而傳信機官員助
力顯出候節者右藩縣並海岸之長官助カセラル
ニ據日本

皇帝政府ヨリ御下命有之度事

尚又非常之場合ニ臨ミ何等之許詔ヲモ御聞取

般之カヲ盡シ速ニ事ノ落着スル様取斗ヲ為

ス兼テ右之長官ハ全權ヲ掌握可致候事

會社之繼立場器械道具建物ニ手過テ之破損又

ハ惡意ニテ啓テ請サル様賢體ニ注意有之候事

總テ臨時ニ費用之保護ヲ請ル事ニ付會社役人

ヨリ日本官員ト談合可致事

第四條

傳信機線之着岸セシムルト右之線ヲ海底ニ沉

ルニ適當ニタル場所ヲ鑿定セシカ為メ會社

ニ兩洲ニ候船内海警ハ周防備後難ヲ橋等難スニ測量ス

ル事其勝手タルハ夕候迄船將ニ於テ其乗組之

番田等々ニ交リ候節不法不軌締之所業無之様

岐度相願マテ可申事

第五條

海峽線沈ノ方陸揚并ニ繼立場等ノ番請得々之

為メ惣雜費右會社限ニテ可致事

第六條

日本政府ヨリノ傳信ハ都テ他之傳信ヨリ可申

ニ傳ヘ可申右者政府ノ格段之理ニ有之候外國
別々テ歐羅巴州トノ通信者佛語或ハ英語ニテ
可認候長崎縣ヨリ他之開港場工右會社之一線
ヲ以通信ニ相成候様立至候ハ、日本語并ニ日
本文字ヲ以傳信イタレ候様日本政府并人民ノ
為手段可致且傳信機ニ仕役スル役人者盡ク誓
詞ヲ為レ傳信ノ趣決レテ他ヘ漏ラス秘密ニ致
リスレハ有ルヘカラス

第七條

日本人民右傳信諸術ニ熟レ右ニ適用スル人物

アリテ會社傳信機組ニ勤仕之儀ヲ願出候時ハ
其會社ニ入ル事ヲ得且會社ニ入ル事ヲ得且會
社之官員ト拘レキ取扱ヲ請一般之利益ニ至ル
迄都テ外々ノ者ト同様タルヘレ

第八條

會社之役人并傳信機用ヲ取扱候者ハ日本人民
ニ對シ以テ不良之行不可致候日本都テ之法則
ニ遵ヒ自己ノ勤メニ不抱ル餘事ニ關係不可致
候事

庚午六月十五日外務大輔殿ヨリ御下ケ

丁株傳信機組建白之畧

右組ニテ取設ル全世界傳信機ノ通信ヲ日本
國ニ結ビ益サニカクノ海底線諸開港相成候
場所先以來開港ニナルヘキ場所工着岸セ
ル事

一右開港場ニテ繼立場取建先繼立場ニテ用ユ
ル會社ノ官員ト右所持ノ諸道具品物共日本
政府ニテ保護スヘキ事

一右兩件丈ケ日本政府ニテ御免許被下候得ハ

其代リトシテ丁株會社ニ於テ左ノ益ヲ日本
政府ニ可献納事

一都テ旧本御入用ノ陸傳信機ハ右會社ニテ
自己ノ雜費ヲ以テ日本政府ノ多ク可取設事
一右ハ旧本政府ノ全ク所持ニ可相成ハ勿論只
右會社ノ雜費ヲ補辦セニカクノ陸傳信機ヨ
リ生ズル利息ノ内ニテ日本政府御決定被成
候相當ノ割合ヲ受取ルヘキ事

一右會社ノ海底線着岸致置候開港場ノ傳信
機ノ支配ト其生ズル利息トニテ丁株會社ニ於

ヲ可受取事

支那日本之方ヨリ来ル海夜傳信線ト魯西

亞國傳信線ト聯合之免許

丁抹國評議官ニ、エフ、チー、ジユニ、商人エア、レユ

チ、エリ、ツセニ、英、サ、イ、ニ、ペー、トル、ス、ボール、グ、府

在留之市人コニ、ユル、セ、子、ラル、ア、レ、ユ、チ、バル

リ、セ、ニ、太平洋之方、西、細、西、洲、中、魯、西、西、領、ト、目、本

國之内、橫濱、長崎、支那之内、上海、福州、香港、ト、之、間

海夜傳信線ヲ、沉、ム、ニ、カ、為、魯國、并、外國、之、法、ヲ、基

本トシ、社中、或、音、組、合、ヲ、建、ニ、專、ヲ、約、ス、○魯西西

國政府、右社中、左、之、執、ヲ、以、テ、太、平、洋、西、西、海

峯、之、魯國、傳、信、線、ト、イ、フ、海、夜、線、ト、聯、合、ス、ル、理、ヲ

附、與、ス

第一、右ニ、イ、フ、海、夜、線、沉、方、之、為、日、本、并、支、那、政

府、之、免、許、ヲ、必、ス、右、社、中、ニ、テ、請、リ、ハ、キ、專、○魯西

西政府ニ、於、テ、ニ、其、線、沉、方、英、陸、揚、之、儀、ヲ、日、本、支

那、之、政府ニ、テ、免、許、アル、様、及、テ、交、音、右、社、中、之、為

周、旋、ス、ハ、キ、ナ、レ、ト、ニ、萬、一、其、企、行、ハ、レ、可、ル、時、ニ

當、リ、魯國、政府ニ、於、テ、預、ル、處、ニ、ア、ラ、ス、○日、本、支

那之内前條ニ載ル場所々ト海底線ヲ通スル事
者其土地之模様ニ依リ右線沉方ニ差支アラサ
ル時ハ右場所々之外強テ他所エ線ヲ沉ムルニ
及フヘカラヌ

第二 沉ムル所ノ線ハ傳信之中絶ナカラサル
様光糸コンドクトルノ數アルヘレ○信書通ノ
増加スル時ハ其増加ニ從ヒ右社中尚別段之海
底線ヲ選滞ナク取設クヘレ

第三 右社中者魯西亜國中亜細亜海岸ニ在ル
政府之傳信線先継立場ト其海底線ヲ聯合スヘ

レ且右社中者其聯合方ニ付要用之仕法ヲ設ケ
サルヲ得ヌ魯西亜海岸ニ海底線陸揚地所之儀
者前廣測量之上魯國政府ト右社中トノ間雙方
談合レ以テ定ムヘレ若他場所モ其都合同様ナ
ル時ハ可成パツレエツト港工陸揚スル方ヲ良
トス

第四 右社中ノ海底線ト魯西亜國之線ト聯合
之節ニ至リ社中ノ望ヨリ右造營其職方細工小
屋等ニ要用之地所ヲ勝手ニ用ヒ其他魯西亜國
律ニテ許ス所之諸事及ヒ此國之法律ニ隨ヒ其

造營ヲ誰人ニテモ賣渡シ又者讓渡ス事ヲ魯國
政府ヨリ右社中ニ免ルニ造營人職人其他總テ
右社中ニ勤仕之諸人員者魯西亜人民之有スル
總テノ理ヲ有シ且此免許之アル間ハ稅銀并軍
務之諸役ヲ免スヘシ

第五 魯西亜傳信線ト聯合スル繼立場ニ右社
中ヨリ其人員之書付ヲ差出スヘシ併シ其人員
者傳信省之間屆ナク命スヘカラス魯西亜政府
ニテ通信之事ヲ差配シ且免職スル事要用ナリ
ト察セハ右社中ニ附屬之諸人員ヲモ免職スル

之理アルヘシ

第六 右社中之海衣線ト魯西亜線ト聯合ニ付
テハ此免許狀布告之日ヨリ五ヶ年之間傳信機
孔設ニ要用之諸物品其他繼立場并内所附屬之
人員之要用品ニ至ル迄無稅ニテ輸入ヲ免スヘ
シ

右等之物品ヲ積場所ニ到着スル蒸氣并雜船共
魯西亜海ニ於テ外國船航海并輸入品ニ付定
之諸稅銀ヲ免ス日本海ニ於テ海衣線ヲ沈没ス
ル間ハ右社中之蒸氣船ヲ守護之為魯西亜政府

ニテ入費ヲ請ケス蒸氣軍艦一艘ヲ附屬セシム
ヘシ

第七 魯西並政府ハ自分入費ヲ以テステレテ
ヒスカ、ヨリ、カバロウ、キ、近之一線并イルクツ
ヨリ右社中之海衣線ト魯國之線ト聯合之場所
近之一線ヲ尚取設クヘシ通信之増加ニ依リ罷
スル丈ケ者政府之傳信線數ヲ増スヘシ

第八 評議官チーレユニ商人ユリツセニ及ヒ
サアレペートルブルグール府在留市人パリツセル
者此免許ヲ請取ル節七ケ條之趣無相違旋行ス

ル證據トシテ政府ニテ證セシ處之金札ニテ仕
来ニ後ニ會計ニニストルヨリ時ニ觸出ス政府
金藏請取相場ヲ以テ十五萬ルーブル之金高ヲ
差出置ヘシ

右證據金ハ支那上海又ハ前文ニイフ日本之港
ト魯西並之内並細並海岸ト聯合セシ海衣線通
信ヲ始ムルニ至リ右證據金ハ差戻スヘシ第九
條ニ載スル年限中ニ海衣線ヲ沈定レ得スレテ
約定期限ニ通信ヲ始メサル時ハ右證據金者魯
西並政府之有トナルヘシ支那日本之政府ヨ

リ海衣線陸揚之免許ヲ得難キ時者格別其節者
魯西亞國名代人ノ奧印ヲレタル證書ヲ差出ス
ハレ

第九 此免許布告之日ヨリ三ケ年之内ニ魯西
亞傳信線ト日本大坂橫濱長崎支那上海迄之
歐聯合之海衣線ヲ右社中ニテ必ラス取設ケ通
信ヲ始ムル事ヲ請合ヘレ且右免許布告之日ヨ
リ五ケ年之内ニ必上海ヨリ福州及ヒ香港ニ海
衣線ヲ沉ムヘレ

右期限内ニ海衣線ヲ取設ケ通信ヲ始メサレハ
此免許状ハ廢物ナルヘレ
若造營中格別之故障起リ其成功ヲ妨クル事ア
アリテ魯西亞政府ニテ尤ト察セハ通信ヲ始ル
迄之奥右年限之外ニ今一ケ年ヲ右社中ニ免ス
ヘレ

第十 右社中者其海衣線ヲ平常善ク注目レ若
損レ等アラハ速ニ修理之為要用之方便ヲナス
ヘレ若其線ヲ取替ル事ヲ要スル時ハ新ニ右社
中ニテ其線ヲ沉替ヘレ右社中ノ海衣線若破損
レ其儘ニテ一ケ年余ニ通信スル事ヲ得サル時

ハ右社中者少レモ償等ヲ申立ル理ナク此格段
之免許ヲ失フヘレ乍併魯西亜政府ニテ至當ト
思フ事件ニテ海底線修理レカタク間者海底線
不通信タリトモ此免許之義ヲ失ハサルヘレ
第十一 魯西亜政府ハ公使并コニレユルヲ以
テ支那日本ニ在ル右社中之傳信之諸建物并ニ
其社中ニ附屬之人員ニカヲ添ヘ保護ヲ為スヘ
レ其人員等ハ魯西亜人同様ニ取扱フヘレ魯西
亜海ニ在ル右社中之海底線ニ付前知スヘキ損
害或ハ航海及ヒ漁業ニテ不慮之損害ナキ豫魯

西亜政府ニテ及フ大ク之保護ヲナスヘレ乍
右之儀ニ付請合ヲ為サス

第十二 魯西亜并ウユルサヲ經支那日本ヨリ
之一ト通り通信ニ十字ニ付最初價百フランク
ト定ムヘレ右之内ヨリ四十フランクハ魯西亜
政府之モノトシテ六十フランクハ右社中之有ト
スヘレ

右之直段者傳信省ト右社中ト相談之上何時ニ
テモ價ヲ減スヘレ魯西亜國之繼立場ヲ經来リ
支那日本ニ傳送スル通信之價者魯西亜國之内

右書簡之来リニ路程之遠近ニヨリ直段書ニア
ル價ニ隨ヒ減スヘシ且右社中之海底線ニテ来
リニ通信路程之遠近者左ニ述フル手續ニ隨ヒ
取極ムハシ支那日本継立場ニ聯合之海底線ニ
テ通信之直段書者傳信省ノ聞届ヲ請ケ右社中
ニテ取極ムハシ
第十三 通信料勘定仕上ケ等之仕方者傳信省
ト右社中ト別段之約書ヲ設クヘシ
勘定ハ三ヶ月毎ニ為スヘシ且フランク金勘定
拂方ハサイニペートルブル府之時相場平均

直段ニテ勘定仕上ケ前十五日中ニ同所ニ於テ
為スヘシ

第十四 當今用ユル所之約書其此後可取極約
書中ニ掲載セル諸箇條之類者右社中之線ニテ
通信スル書簡之事ニ付要スル所之モノナリ

政府傳信線ト右社中傳信線ト併合之継立場ニ
於テハ右社中ハ政府傳信勤勞之為取設ケタル
規則ニ隨フヘシ

第十五 雙方之傳信線ニテ勤務之通信殊ニ支
那日本傳信之事務其費用ニ係ル通信者雙方

償ナク右社中之海底線先魯西亜之線共ニ通信
スヘシ魯西亜政府之書翰者然テ他之傳信ヨリ
前ニ達スヘシ

戦争之節ト雖トモ乎人之書翰ニテ戦争事件又
者政府之利害先國務ニ携ハラサル通信者中絶
ナク為スヘシ

第十六 此免許状之時間者三十ヶ年タルヘシ
右期年中者魯西亜政府ニテ大平洋魯西亜領
細亜海岸ニ在ル魯西亜傳信線ト日本支那ヨリ
来レル傳信線ト聯合之儀ヲ決シテ他ニ免スヘ

カラス右社中之方ニ於テモ此免許年限中者日
本支那ヨリ来レル通信ヲ魯西亜之線之外決シ
テ他之線ヲ以テ達スヘカラス大平洋魯西亜海
岸ニ聯合之右社中海底線ニテノ通信ハ始終中
絶^{本令}ナカルヘカラス

第十七 魯西亜政府ノ企ニテキアク夕ヨリ社
京ヲ通シ天津マテ傳信線ヲ造營セシ時ハ外組
合ヲ除キ右社中ニテ其海底線ト^{右線}聯合シ前同様
免許状年限中者通信スル事ヲ得ヘシ若社中ニ
テ二ヶ年之内ニ右之免許ヲ受用セサル時ハ魯

西亞政府ニテ右線ヲ支那日本ノ港ト聯合サセ
ニカ為イ他ノ仕方ヲ取ル事勝手タルヘシ
支那國地ニ陸傳信線造營之節者仮令支那政府
ニテ取建候ニモ魯西亞政府ニテ取設ルトモ魯
西亞政府ニ於テ其支那陸地傳信線ト右社中之
海峽線ト聯合セサル上者右社中之線ト魯西亞
線ト聯合ノ線ニテ日本支那ヨリ来レル通信ヲ
其陸地傳信ニテ達レ方ヲ決レテ為ハカラス支
那陸地傳信線ト社中海峽線ト聯合サセニカ為
其陸傳信線造營主ノ承諾ヲ請レ日ヨリニケ年

之間ト免スヘシ右年限ヲ過レ後者其支那國地
傳信線ニテ音信達レ方ニ付魯西亞政府ノ約定
廢物トナルヘシ
第十八 約定ノ三十ケ年過レ上者魯西亞政府
ニテ免許振ヲ申込ムヘシ若其免許振ヲ右社中
ニテ承引セサル時者政府ニテ相當ト思フ他人
ニ支那日本ヨリ来ルヘキ海峽線ヲ魯西亞傳信
線トシ其線ニテ聯合通信スルニ免許ヲ與フル
理アルヘシ去右社中ノ海峽線ノ通信ヲ留ム
ハ勿クモ亦魯西亞傳信線トノ聯合モ其儘タル

ハレ〇右社中ノ線ヨリ魯西亜線ハノ通信連
カノ申合ハ政府ト社中トノ間ニ穩便ニ取極ム
ヘレ右社中ニテ魯西亜領港内ニ取設ケレ諸造
營ハ右社中又者其節預レル所ノ人ニ屬スヘレ
第十九 組合共ニ社中ノ法者魯西亜國法ニ依
テ設クル事ヲ得ヘレ其節ハ政府ノ承引ヲ請ル
為ノ其法則ヲ必差出スヘレ亦他國ノ法ヲ設ク
ルモ差支ナレ然レトモ右社中ハ總テ利法先金
銀引請ノ事ニ付テハ政府ニ對セレ事ニテモ又
者庶人ニ對セレ事ニテモ魯西亜國法ニ隨フハ

レ右免許年限中者魯西亜國ハ右社中ノ代人ヲ
差出レ置ヘレ
第二十 魯西亜國ニ在ル右社中ノ人員ノ間ニ
起レル總テ爭論者魯西亜國ノ法律ニ隨以裁判
スヘレ
第二十一 此免許狀ノ箇條ノ遵守又者箇條中
之意味ニ付起レル爭論者右社中ニテ結局ニ
ユストルノ集評ノ媒妙ニ任スヘレ
第二十二 魯西亜政府ノ聞届ヲ請ル上者右社
中ニテ此免許ヲ他ノ組合ヘ譲渡ス事勝手タル

ハレ但右免許中免セル庶々并ニ約定スル所ノ
庶々ニ於テ異變ナカルハレ

内國事務執政

テマレエフ

評議官テイロジユン

并ニ商人ユリソセン

ニ代リテ

市人

ハニスジユスセン

パリツセン

庚午八月廿五日交換傳信摺條約書

日本政府及ヒ丁抹

皇帝陛下使節ト議ヒテ丁抹國デット、ストレ、イ

ルテスク、レナ、オク、ヤパン、エキステンレユン、テ

レカラフ、セルスカト 東北支那并日本ハ傳信摺取設方會社ノ名會社

ノ傳信摺ヲ日本地方ニ陸揚スル免許ノ約定

第一條

丁抹國デット、ストレ、イルテルスク、レナ、オク、ヤ

パン、エキステンレユン、テレガラフ、セルスカト

東北支那并日本へ傳會社ノ海中傳信機ヲ大目
信機取設方會社ノ召
本國橫濱長崎兩開港ニ於テ陸揚ニ且海中八九
州四國ノ南方ヲ廻リ其海底線ヲ右兩港ト相接
セシムル事ニ付日本政府右會社ニ允准セリ

第二條

長崎橫濱ニテ右傳信機取設方ノ用意ヲナシ且
其局ヲ建ルタメ會社ニテ費用ノ地ヲ借得ヘシ
尤兩港ノ日本官府ヨリ差支ナキ地ヲ指示シ可
成夫ケ海濱ニ切近シテ其局ヲ建シメ且其機線
ヲ地上ニ導ク為ニ緊要ナルノ外之ヲ最モ短ク

スヘシ

第三條

傳信局其外建物ノ為借受タル地及傳信用ノ品
物ノ條約面ニ從フテ之ヲ拂フヘシ

第四條

會社ノ機線損スルト雖モ日本政府其責ヲ受ヘ
カラス然レ日本政府ニテ右陸上ノ線及ヒ柱ヲ
自國所持ノ線及ヒ柱同様ニ防護スヘシ且從來
傳信機損スル事ニ付布告セシ刑律ハ日本領内
ノ水陸ニ在ル丁抹會社傳信機ニアリテモ同般

ニ行ハルヘシ

第五條

日本人若シ日本領内ノ水陸ニ在ル丁株會社傳
信狀ヲ損スルモノアリテ其証據明白ナレハ會
社其者ヨリ其償ヲ得ルカ為訴出ルノ理アルヘ
シ

第六條

會社ニテ使役スルモノハ各其本國ノ戸籍ニ列
セルモノニシテ其本國ト日本トノ條約ヲ守リ
且日本ノ法ヲ遵奉スヘシ

第七條

日本人民右傳信諸術ニ熟シ右ニ適用スル人物
アツテ此傳信株式會社ニ入ニテ請トキハ之ヲ免
シ且會社ノ官員ト均シキ取扱ヲ受ケ一般ノ利
益ニ至ル迄他人ト同様タルヘシ

第八條

日本政府ニテ傳ニト欲スル信ハ他ノ傳信ヨリ
必先ニ送ルヘシ

第九條

日本政府ハ此度會社ニ其業ヲ管マシムル為ニ

之ヲ允准セシモノナレハ只一般ノ保護ヲナス
ノ外必シモ關係スル事ナレ向後モ同業ヲ起
サント欲スルモノアリテ之ヲ允准スル事アリ
トモ會社ニテ決テ苦情ヲ唱フル事アルハカラ
ス尤若シ日本政府他國ノ會社ニ此免許ヨリハ
多ク利益ノアル免許ヲ出ス時ハ丁秣ノ會社ニ
モ右同様ノ利益ヲ差許スヘシ

第十條

此約定海底線成就ノ年ヨリ三十年ノ間施行シ
三十年ヲ過ル時ハ合議シテ箇條ヲ改革ス可シ

第十一條

此約書原文ハ日本語ニ通佛朗西語ニ通テ認ム
ヘシ

明治三年庚午八月廿五日

洋曆一千八百七十年九月廿日

於東京

外務卿

澤從三位清原宜嘉花押

外務大輔

寺嶋從四位藤原宗則 全

丁抹使節

レユリーレツキ印

内約ノ添個條

第一條

横濱ト長崎ノ間ニ日本政府ノ陸傳信機施行ノ
日ヨリ横濱ト長崎ノ間ニ取立ル丁抹會社ノ海
底線ヲ以テ差送ル総テノ傳信ノ價銀ノ二分五
厘ヲ日本政府ニ収ムヘシ

第二條

若以後日本政府ハ丁抹ノ會社ニ加入セントレ
或ハ長崎ヨリ上海迄并ニ長崎ヨリ横濱迄丁抹
會社ノ海底線ヲ買入ント欲スル時ハ丁抹會社
ニ於テ右兩線製造雜費ノ元金ヲ證明スヘキ公
書ヲ無差支丁抹會社ヨリ日本政府ニ差出スヘ
レ其節ハ日本政府ヨリ丁抹會社ニ直ニ相談致
レ會社ニテ賣リ又ハ加入ノ丁ヲ承諾セハ合議
レテ相當ノ價ヲ以テ取極ムヘシ
右添約定ノニケ條ハ本書ニ記スルト同様ニ雙
方ニテ之ヲ守ルヘシ

明治三年庚午八月廿五日
洋曆一千八百七十年九月廿日

於東京

外務卿

澤從三位清原宣嘉花押

外務大輔

寺島從四位藤原宗則花押

丁抹使節

レユリーレツキ印

九月朔日出ス

丁抹專使ヨリ之書簡

昨日御面悟之節御談判イタレ候趣ニ依リ茲ニ
改而申述候日本政府へ對レ丁抹傳信社中ノ名
代トレテ千八百七十年第九月二十日取結タル
傳信内約添箇條第一條中橫濱長崎トノ間日本
政府陸地傳信執施行ノ日ヨリ橫濱ト長崎之間
ニ取立ル丁抹會社ノ海衣線ヲ以テ差送ル總テ
ノ傳信賃銀之ニ分五厘ヲ日本政府へ収ムヘシ
ト有之箇條之趣ニ從レ其期限ニ至リ候ハ、日

政府金庫ニ納ムヘキ質銀請取高差引ヲ一ク
月毎又ハ三ヶ月毎ニ日本政府ヘ明白ニ勘定相
分り候様之仕方ヲ設ケ吃度其箇條之趣ヲ相守
リ可申候丁抹杜申頭取ノモノ右之儀ニ付費用
ノ差圖ヲナレ其期々ニ至リ候ハ、信實公平之
仕方ヲ以テ右勘定合ノ取極出来候様行ハルヘ
キ良法ヲ指示レ可申候

横濱千八百七十年第九月二十一日

特任公使

ジエリーデレツキ

外務卿大輔閣下

午九月廿三日

魯國出士ヘ之書翰

以手紙致啓上候然者兼而御申越有之候丁抹國
電機製造會社ニテ我國エ電信機線ヲ陸揚致度
義ニ付此程同國使節ジエリニツキト談合之
上横濱長崎兩港エ陸揚之免許約定書為取替ヲ
ヨヒ候委細者同國政府ヨリ御承知之事ト存候
ハ其為御心得此段申入候石可得御意如此御坐

庚午九月廿三日
外務大臣

魯國出士

タラベテニベルム

貴下

癸午十月廿二日出ス

魯國出士ヨリ之書翰

第九十號

當年九月廿三日附第一號貴翰致落手候然者テ

子マルカ電信機製造會社ニテ貴國近陸揚電信
機製造イタニ候儀貴政府免許ニ相成且同國使
節ト約定取替ニ相成候段御申裁之趣於拙者致
大慶候同人ヨリハ右約定之馬イマタ落手イタ
ニ不申候得共定而近日ニ差送り申事ト被存候
併和文之馬我政府エ差遣申候筈ニ付乍御手數
何卒右馬一冊拙者方エ御遺ニ被下度至願仕候
此段得貴意度如此御坐候以上

千八百七十年十月廿六日 魯國コンスル

ヲラロウスキイ

馬渡外務権大丞
宮本外務大丞

貴下

外務省記録簿 廿

左院
藏書

各國使其他参朝手續勅詔言上調

詔勅書

國書

各國公使其他參 朝手續 勅語言上調

明治五年

明治五年壬申十月十七日魯國アレキシアレ

キサンロウイキ親王參 朝式

未ル十七日第一字親王參 朝有之候豫外務卿

ヨリ前以公使へ書翰相達候事

當日關係之官員直垂帶劍之事

當日為誘導伊達後二位延造館へ相致候事

但外務省判任官附從之事

當_レ川中警衛騎兵一小隊之事

此_レ警衛者邏卒ニテ固之

道筋

延邊館ヨリ汐苗橋ヲ渡リ二葉町幸橋御門へ入
東皇前ヨリ左リ通り外務省前ヨリ櫻田御門
ヨリ大手へ

大手へ二大隊豫備親王通行之節捧銃ノ事

一重橋御門内へ近衛兵二小隊整列親王通行ノ

節捧銃之事

警衛騎兵隊ハ大手御門_{ニ外}テ解護之事

大手御門中仕切御門二重橋御門等守兵親王通
行之節捧銃之式ヲ行フ

親王并隨從士官 兵 御車寄造衆車被許候事

親王御車寄ヨリ昇殿之事

但此處へ外務卿式部助外務丞出迎御車寄
上へ有栖川宮太政大臣出迎外務卿親王ヲ
引テ大廣間ニ進ム

此前親王旅館出門報知ヲ以言上ス外務官員親
王大手ニ至ルヲ式部助へ告ケ式部助再言上ス
次ニ宮大臣參議議長諸省長官下段ニ東面シテ

次奏樂

取出 御立 御東面 親王ノ進来ヲ待セラル有栖川

一品親王上段西側ニ上リ侍立

次副島外務卿伊達從二位親王ヲ誘引レ親王大

廣間ニ進ミ上段右之方ニ昇リ西面ニ立ル外

務卿從二位下段ニ北面レテ立

此間停樂

但外務省ハ等出仕志賀親朋隨後レテ進ミ

外務卿之左へ着ク

代理公使兼海軍中少將及ヒ親王附一名船將二

名ハ親王ニ隨後レテ伊達從二位ノ次ニ立一列其餘

隨從魯ノ官員ハ式部官員誘引大廣間三疊目ニ

進ム

御對顔 御會釋 勅語アリ

但親朋譯ス 親朋外務省ハ等出仕志賀親朋也

次親王答言アリ

但親朋譯ス

右畢テ退ク隨後公使等各一揖レテ退ク

次入御

親王退出、第御車寄ヨリ有栖川宮御同車外務

御伊達後二位代理公使中少將以下隨從士官
乘車被差許候事

伊達後二位親王ヲ吹上御庭紅葉亭へ誘引外
務系記附從

親王吹上御庭御門内便冨ノ所迄乗車被差許候
事御庭御門内紅葉離宮ト見
離宮トノ間マテ乗車ノ事

但馬車差支候節ハ御馬ヲ賜フ
隨從士官ハ吹上紅葉亭扣所迄乗車被差許候事

行幸于瀧見離宮
離宮ニ至ル有栖川親王太政大臣階邊へ出迎魯

親王胡床前へ進ム

次御會釋

御椅子ニ着 御

魯親王着胡床有栖川親王亦胡床ヲ賜リ侍座ス

太政大臣外務卿宮内卿伊達後二位 并魯公使

及海軍中少將親王附舩將二名ハモ又胡床ヲ

賜リ侍坐ス自餘親王附從士官紅葉亭ニ扣居

ル

代理公使海軍中將海軍少將ハ

勅詰ヨリ 御請口上アリ

茶菓饗之大臣以下及公使中少將上モ同ク給之

但侍從役之

御對話了リ親王退去之節有栖川親王太政大臣

階邊へ送ル伊達從二位誘引レテ退ク

外務卿並記吹上御庭乘車之所迄送ル親王帰路

ノ節誘導諸衛如初

親王帰館後有栖川二品親王就テ勞之

魯親王アレキセイアレキサンドロウ井千へ

勅語 於大廣間

全球御周覽ノ行ヲ以テ我國へモ御立寄ノ儀申

入レニ望ノ如ク御光来相成如何計満悦ノ事

ニ候

貴國皇帝皇后陛下益御安泰ニレテ全邦弥平寧

ニ可有之一體貴國ト我國ハ鄰近ニテ從來ノ交

モ亦淺カラズ然ルニ此度殿下ノ御入来有レハ

後来兩國ノ歡交弥以テ厚カル可キ徵候ニレテ

國ノ面目朕ノ欣喜何事力是ニ増レ可申ヤ

魯親王奉答

我貴國ノ地ハ初テ上陸セシ時ヨリ

陛下ハ御面謁スルノ満足ノ時ヲ待無居候

陛下御スル處ノ處々ニ於テ殆別厚キ饗應ヲ受

候段我誠衷ノ厚謝

陛下ハ言上セサルヲ得カタキ程ナリ其厚謝ハ

今ノ

陛下ノ懇言ヲ以テ猶重大ニセリ今

陛下ハ御面謁セシ事及シ貴國ニテアリシ事總

テ大満悦ヲ以テ我父天皇陛下ハ具ニ奏問セサ

ルヲ得ス爰ニ實ニ

陛下ノ 勅命ニ應ヒ我ヲシテ長逗留セサルヲ

得サルハ遺憾ナラシムル程ノ御款待ナリ此度

ノ我参昇及ヒ

陛下ノ御機嫌ヲ伺ヒシハ幸ニ従来ヨリ行ハル

ノ處且我父天皇ノ甚懇望スル處ノ兩國ノ懇親

ヲ益益ニ堅固ニスル助ケトナラハ我満悦是ヨ

リ大ナルハ無シ

代理公使エウゲニヒユーツオフハ

勅語 於境見雜官

卿光未相成 朕ノ素懷以テ遂ケタリ

右御請

陛下ハ奉拜謁毎ニ余ハ常ニ大幸ナルカ今殿下
ノ前ニ於テ

陛下ハ奉拜謁ハ余カ為メ拔羣ノ大幸ナリ

侍從長兼海軍中將コニスタンテニホニエツト

ハ

勅語

於滝見離宮

卿親王ヲ補佐シ忝モ勲勞アル由ヲ聞ケリ今親

王ノ入来アルニ因テ亦卿ヲモ見ル事ヲ得タリ

朕カ喜ヒ知ルハニ

右御請

我カ微少ノ勞

陛下ノ叡聞ニ達セシ段我天幸ナリ此度我親王
受ル所ノ

陛下ノ御懇意及ヒ全日本國ノ懇切ヲ見抑今殿

下ノ貴國ハ參拜セシ所以ヲ伏テ惟ルニ

陛下御スル所ノ貴國ハ我先年来リテ後物語ニ

侍從兼海軍少將ニハイウテ想トラスキハハ也

東詔

於滝見離宮

卿光未相成 朕ノ素懐以テ遂ケタリ

右御請

陛下ハ奉拜謁毎ニ余ハ常ニ大幸ナルカ今殿下
ノ前ニ於テ

陛下ハ奉拜謁ハ余カ為メ拔羣ノ大幸ナリ
侍從長兼海軍中將コニスタンチンポリエット

ハ

勅詔 於滝見離宮

卿親王ヲ補佐ニ忝モ勲勞アル由ヲ聞ケリ今親
王ノ入来アルニ因テ亦卿ヲモ見ル事ヲ得タリ

朕カ喜ヒ知ルハニ

右御請

我カ微少ノ勞

陛下ノ叡聞ニ達セニ段我天幸ナリ此度我親王
受ル所ノ

陛下ノ御懇意及ヒ全日本國ノ懇切ヲ見抑今殿
下ノ貴國ハ参昇セリ所以ヲ伏テ唯ルニ

陛下御スル所ノ貴國ハ我先年来リテ後物詔ニ
事ニ萬一此中ニ在ルハヒト思フハ我甚幸也

勅詔 於滝見離宮

先日一見後安寧ニレテ又相見ル 朕之ヲ悦レ
ク思フ

右御請

我カ為メ

陛下ノ御懇命ヲ謹謝奉ル事ヲ許レ賜ハ指揮官
兼組ノ我カ「コルウエー」秋ウイテヤス艦ハ歐
羅巴國口ノ軍艦ノ内ニテ洋中於テ初テ

陛下ノ御簇ハ祝砲奉ル事ヲ得殊ニ

陛下長崎御着港ノ砌ハ魯國軍隊ヨリ「ウー」ラノ

祝言ヲ奉リ魯國信号簇ヲ揚飾レ祝砲ヲ奉リ

陛下ノ御母着ヲ祝レ奉リレハ是我カ大幸ナリ
貴皇國及ヒ其國人ノ為既ニ

陛下御施行遊サレタル良善及ヒ即今御施行ア
ルヲ余甚恭敬恐懼奉ルハ外我國人ニモ同然ナ
リ

親王参内ノ節隨從於正殿拜謁ノ名

代理公使

ビエツオフ

侍從長兼海軍中將

ポレエツト

侍從兼海軍少將

フエドロフスキー

親王附宮内省四等出仕

ミーテレン

侍從兼海軍大佐スウエツラ
十号船將

クレーメル

海軍中佐ウイテヤ
ス号船將

ナジローモフ

親王附醫官

クヅリン

親王附士官

ツグイル

少將附士官

ペレリニン

フレガット秋スウエツラ十艦

海軍大佐ニワシ

同 大尉ゲスヤン

同 同 ヨツロフ

同 少尉クリーゲル

同 同 フリチエロ

陸軍大尉ホワロワ

海軍少尉モレユン

同 同 ノウイツキー

海軍曹長レウエリチノフ

軍曹 ヤコブソニ

コルウエーツ形ウイテヤス艦

海軍大尉チリコフ

同 同 ダウイードフ

同 同 パレーノウオ

同 同 リムスキーコルサコフ

同 少尉コプラフ

同 同 ベルワマン

同 同 ロジダスツウエンキー

同 同 コセレオフ

同 同 スタウイツキー

同 同 ロジオノフ

通計廿九名

詔勅書

詔勅

日本國天皇告各國帝王及其臣人嚮者將軍德川慶喜請歸政權制允之內外政事親裁之乃曰從前條約雖用大君名稱自今而後當換以天皇稱而各國交際之職專命有司等各國公使諒知斯旨

慶應四年戊辰正月十日

御名印

朕夙二天位ヲ紹キ今日天下一新ノ運ニ膺リ文武一途公議ヲ親裁ス國威之立不立蒼生ノ安不

以下
附

朕ハ朕カ天職ニ盡不盡ニ有レハ日夜不安寢食
甚心思ヲ勞ス朕不肖ト雖モ列聖之餘業先帝之
遺意ヲ継述シ内ハ列藩萬姓ヲ撫安シ外ハ國威
ノ海外ニ輝ツシ事ヲ欲ス然ルニ德川慶喜不軌
ヲ謀リ天下解體遂ニ及騷擾ニ萬民塗炭ノ苦ニ
陷ニトス故ニ朕不得已断然親征之議決セリ且
已ニ布告セシ通り外國交際モ有之上ハ將來ノ
處置尤重大ニ付天下萬姓ノ為ニ於テハ萬里ノ
波濤ヲ凌キ身ヲ以テ難苦ニ當リ誓テ國威ヲ海
外ニ振張シ祖宗先帝ノ神靈ニ對ニト欲ス汝列

劄

藩朕カ不逮ヲ佐ケ同心協力各其分ヲ盡シ舊テ
國家ノ為ニ努力セヨ

慶應四年戊辰二月廿八日

- 一 廣ク會議ヲ起シ萬機公論ニ決スヘシ
 - 一 上下心ヲ一ニシ盛ニ經綸ヲ行フヘシ
 - 一 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲ
シテ倦マサラシメンコトヲ要ス
 - 一 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ
 - 一 智識ヲ世界ニ求メ大ニ
- 皇基ヲ振起スヘシ

我國未曾有ノ變革ヲ為ントレ
朕躬ヲ以テ衆ニ先ニレ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯
國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立ントス衆亦此首
領ニ基キ協心努クセヨ

慶應四年戊辰三月

朕幼弱ヲ以テ粹ニ

大統ヲ紹キ爾來何ヲ

以テ萬國ニ對立レ

列祖ニ事ハ奉ランヤ

ト朝夕恐懼ニ堪ハサルナリ竊ニ考ルニ中葉

朝政衰ヘテヨリ武家權ヲ專ハラニレ表ハ

朝廷ヲ推尊レテ實ハ敬レテコレヲ遠サケ億兆

ノ父母トレテ絶ヘテ赤子ノ情ヲ知ル事能ハサ

ルヤウ計リナレ遂ニ億兆ノ君タルモ唯名ノミ

ニ成リ果テ其カ為ニ今日 朝廷ノ尊重ハ

古ハニ倍セレカ如クニテ 朝威ハ倍衰ハ

上下相離ル、コト霄壤ノ如レカ、ル形勢ニテ

何ノ以テ天下ニ君臨セシヤ今般 朝政一

新ノ時ニ膺リ天下億兆一人モ其外ヲ得サル時

ハ皆 朕カ罪ナレハ今日ノ事 朕自身

骨ヲ勞レ心志ヲ苦メ艱難ノ先ニ立古ハ

列祖ノ盡サセ給ヒレ蹤ヲ履ミ治蹟ヲ勤メテコ

ソ始テ 天職ヲ奉レテ億兆ノ君タル所ニ
背カサルヘシ往昔 列祖萬機ヲ親ラレ不
臣ノモノアレハ自ラ將トレテコレヲ征シ玉ヒ
朝廷ノ政総テ簡易ニシテ如此尊重ナラサルユ
ハ君臣相親レミテ上下相愛レ德澤天下ニ洽テ
國威海外ニ輝キレナリ然ルニ近來宇内大ニ開
ケ各國四方ニ相雄飛スルノ時ニ當リ獨我國ノ
ミ世界ノ形勢ニウトク舊習ヲ固守レ一新ノ效
ヲハカラス 朕徒ニ九重中ニ安居レ一日
ノ安キヲ偷ミ百事憂ヲ忘ル、時ハ遂ニ各國ノ

凌侮ヲ受ケ上ハ 列聖ヲ辱レノ奉リ下ハ
億兆ヲ苦レメン事ヲ恐ル故ニ 朕コ、ニ
百官諸候ト廣ク相誓ヒ 列祖ノ御偉業ヲ
継述レ一身ノ艱難辛苦ヲ問ハス親ラ四方ヲ經
營レ汝億兆ヲ安撫レ遂ニハ萬里ノ波濤ヲ拓開
レ國威ヲ四方ニ宣布シ天下ヲ富岳ノ安ニ置シ
コトヲ欲ス汝億兆舊來ノ陋習ニ慣レ尊重ノミ
ヲ 朝廷ノ事トナレ 神州ノ危急ヲ
知ラス 朕一タヒ足ヲ舉レハ非常ニ驚キ
種々ノ疑惑ヲ生シ萬口紛紜トシテ

朕カ志ヲナサ、ラレムル時ハ是 朕ヲレ

ヲ君タル道ヲ失ハレムルノミナラス從テ

列祖ノ天下ヲ失ハレムル也此億兆能々

朕カ志ヲ體認シ相率テ私見ヲ去リ公義ヲ採リ

朕カ業ヲ助ケテ 神州ヲ保全シ

列聖ノ神靈ヲ慰ヒ奉ラレメハ生前ノ幸甚ナラ

ニ

三月

朕今萬機ヲ親裁シ億兆ヲ綏撫ス江戸ハ東國第

一ノ大鎮四方輻湊ノ地宜シク親臨以テ其政ヲ

刪

視ルヘシ因テ自今江戸ヲ稱シテ東京トセシ是
レ 朕ノ海内ニ家東西同視スル所以ナリ
衆庶此意ヲ體セヨ

辰七月

朝綱一タヒ弛ミシヨリ政權久シク武門ニ委ス

今ヤ 朕 祖宗ノ威靈ニ頼リ新ニ

皇統ヲ紹キ大政古ニ復ス是大義名分ノ存スル

所ニシテ天下人心ノ歸向スル所ニ嚮キニ徳川

慶喜政權ヲ還ス亦自然ノ勢況ヤ近時宇内形勢

日ニ關ケ月ニ盛ナリ此際ニ方テ政權一途人心

刪

受タルニ非サレハ何ヲ以テ國侍ヲ持シ紀綱
ノ振ハニヤ茲ニ於テ大ニ政法ヲ一新シ公卿列
藩及ヒ四方ノ士ト與ニ廣ク會議ヲ興シ萬機公
論ニ決スルハ素ヨリ天下ノ事一人ノ私スル所
ニ非サレハナリ然ルニ與羽一隅未タ
皇化ニ服セス忘^新リニ陸梁ニ禍ヲ地方ニ延ク
朕甚タコレヲ患ク夫四海ノ内孰レカ
朕ノ赤子ニアラサル率土ノ濱亦 朕ノ一
家ナリ 朕^廷ノ一家ナリ 朕庶民ニ於
テ何ソ四隅ノ別ヲナシ敢テ外視スル事アラシ

ヤ惟 朕ノ政體ヲ妨ケ 朕ノ生民ヲ
害ス故ニ己ヲ得ス五畿七道ノ兵ヲ降シ以テ其
不庭ヲ正ス顧フニ與羽一隅ノ衆豈悉ク乖乱昏
迷セシヤ其間必ス大義ヲ明ニシ國體ヲ辨スル
者アラシ或ハ其力及ハス或ハ勢支フル能ハス
或ハ情實通セス或ハ事體齟齬ニ以テ今日ニ至
ルカクノ如キモノ宜ク此朕ヲ失ハス速ニ其方
向ヲ定メ以テ其素心ヲ表セハ朕親ニク撰リ所
ヲヲニ繼令其黨類ト雖モ其罪ヲ悔悟ニ故心服
歸セハ 朕豈コレヲ隔視セニヤ必ク歟

ルニ至當ノ興ヲ以テセシ玉石相混シ薰蕕共ニ
同スルハ忍ハサル所ナリ世衆庶宜シク此意ヲ
體認シ一時ノ誤リニ因テ千載ノ辱ヲ遺スソト
ナカレ

八月

詔體太乙而登位膺景命以改元洵聖代之典型而
萬世之標準也

朕雖否德幸賴

祖宗之靈祇承鴻緒躬親萬機之政乃改元歆與海
內億兆更始一新其政慶應四年為明治元年自今

以後革易舊制一世一元以為永式主者施行

明治元年九月八日

詔皇國一體東西同視

朕今幸東京親聽內外之政汝百官有司同心戮力
以翼鴻業凡事之得失可否宜正議直諫啟汝
朕心

明治元年戊辰十月

詔崇神祇重祭祀

皇國之大典政教基本
然中世以降政道漸衰祀典不舉遂馴致綱紀不振
朕深慨之方今更始之秋新置東京親臨視政將先

興祀典張綱紀以復祭政一致之道也乃以武藏國
大宮驛米川神社為當國鎮守親幸祭之自今以後
歲遣奉幣使以為永例

明治元年戊辰十月

賞罰ハ天下ノ大典

朕一人ノ私スヘキニ

非ス宜ク天下ノ衆議ヲ集メ至正至平毫釐モ誤
リ無キニ決スヘシ今私平容保ヲ始メ伊達慶邦
等ノ如キ百官將士ヲシテ議セシムルニ各小異
同アリト雖モ其罪均シク逆科ニアリ宜ク嚴刑
ニ處スヘシ就中容保ノ罪天人共ニ怒ル所死尚

餘罪アリト奏ス

朕熟ラ之ヲ按スルニ政

教世ニ洽ク名義人心ニ明ナレハ固リ乱臣賊子
無ルヘシ今ヤ 朕不徳ニシテ教化ノ道未
ク立ス加之七百年來紀綱不振名義乖乱弊習ノ
由テ来ル所久シ抑容保ノ如キハ門閥ニ長シ人
爵ヲ假有スル者今日逆謀彼一人ノ為ス所ニ非
ズ必首謀ノ臣アリ 朕因テ断シテ曰其實
ヲ推シテ其名ヲ恕シ其情ヲ憐シテ其法ヲ假シ
容保ノ死一等ヲ宥メ首謀ノ者ヲ誅シ以テ非常
ノ處ニ處セン 朕亦將ニ自今親ラ勵精

蕃落多化ヲ國內ニ布キ徳威ヲ海外ニ輝ソシヨ
テ歎ス此百官將士其レ之ヲ體セヨ

十一月

朕惟ミルニ在昔 神皇基ヲ肇メレヨリ

列聖相繼キ以テ 朕カ躬ニ逮フ

朕否徳夙夜兢業 先皇ノ緒ヲ墜サシコト

ヲ懼ル曩者兇賊 命ニ授レ億兆塗炭ニ苦

シム幸ニ此百官將士ノ力ニ頼リ速ニ戡定ノ功

ヲ奏レ萬姓堵ヲ安スルニ至ル今茲歲在己巳三

元啓端上下又寧遠邇未賀ス 朕何ノ慶カ

之ニ如レ惟フニ天道靡常一治一亂内安ケレハ

必外ノ患アリ豈ニ戒慎セサル可ニヤ

朕益ス 祖業ヲ恢弘レ覃テ中外ニ被ラレ

メ以テ永ク 先皇ノ威徳ヲ宣揚セシコト

ヲ庶幾ス此百官將士勉勵不懈各其職ヲ竭レ敢

テ怠憚ナク 朕カ嗣漏ヲ匡救セヨ此百官

將士其勉旃

明治二年正月五日

朕將ニ東臨公卿群牧ヲ會合ニ博ク衆議ヲ諮詢

ニ國家治晏、大基ヲ建ニトス抑制度律令ハ政

治ノ不億兆ノ頼トコロ以テ輕レク定ム可ラス
今ヤ公議所法則畧既ニ定ルト奏ス宜ク速ニ開
例レ局中禮法ヲ貴ニ悞和ヲ旨トシ心ヲ公平ニ
務レ議ヲ精確ニ期レ專ラ 皇祖ノ遺典ニ
基テ人情時勢ノ宜ニ適レ先後緩急ノ方ヲ審ニ
レ順次ニ細議ニ以テ聞セヨ 朕親レ之
ヲ裁決セシ

二月

詔朕嚮ニ汝百官群臣ト五事ヲ掲ケ天地神明ニ
實ニ綱紀ヲ皇張ニ億兆ヲ綏安スルヲ誓フ然ル

ニ兵馬倉卒未タ其績ヲ感サス 朕夙夜上
ハ以テ神明ニ畏レ下ハ以テ億兆ニ懋ツ今ヤ乃
テ親臨汝百官群臣ヲ朝會ニ大ニ施設スルノ方
ヲ諮詢ス是神州安危ノ決今日ニ在リ誠ニ宜ク
腹心ヲ披キ肺腑ヲ表ニ可否ヲ献替スヘシ
朕將ニ勸精竭力大ニ經始スル所アラントス汝
百官群臣ソレ勗哉

明治二年己巳四月

朕惟ニ治亂安危ノ事ハ任用其人ヲ得ト不得ト
アリ故ニ今敬テ 列祖ノ靈ニ告テ公選

ノ法ヲ設ケ更ニ輔相議定參與ヲ登庸ス
神靈降鑑過ナカラシムコトヲ期ス汝衆ハト欺意
ヲ奉セヨ

明治二年五月十三日

朕惟復 皇道之衰濟天下之溺一資汝有衆
之力而其建節巖疆宜咸遠方艱苦盡瘁無所不至
朕切嘉獎之乃頒賜以酬有功顧前途甚遠矣厥克
翼贊大成 朕益有望本云汝々有々衆々其懋哉

明治二年己巳六月二日

朕登祚以降海内多難億兆未夕綏寧セズ加之今

歲淫雨農ヲ害シ民將ニ生ヲ遂ル所ナカラント
ス 朕深ク怵惕ス依テ躬ヲ節儉スル所有
テ以テ救恤ニ充ニトス主者施行セヨ

己巳八月二十五日

方流賊鷓張汝有衆建節宣威艱苦盡瘁克靖北疆
朕嘉獎之廼頒賜以酬有功汝有衆懋哉

明治二年己巳九月十日

朕惟 皇道復古 朝憲維新一資汝有
衆之力 朕切嘉獎之廼頒賜以酬有功汝有
衆懋哉

明治二年己巳九月廿六日

朕聞明君德ヲ以テ下ヲ率ヒ庸主法ヲ以テ人ヲ
待ツ顧フニ亂賊常ニ有ラス君德奈何ニアルノ
ミ今ヤ北疆始テ乎キ天下粗定ル慶喜容保以下
ノ如キ各宜ニク寛宥スル所アツテ自新ニセシ
メ以テ天下ト更張セシ

明治二年己巳九月廿八日

朕恭惟

太祖創業崇敬

神明愛撫蒼

生祭政一致所由未遠矣

朕以寡弱夙承

聖緒日夜悚惕懼天職之或虧乃祇鎮祭

天神地祇

八神暨

列皇神靈于神祇

官以申孝敬疾災使億兆有所矜式

明治三年庚午正月三日

朕恭惟

天神

太祖立極垂統

列皇相承繼之述祭政一致億兆同心治教明于上
風俗美于下而中世以降時有汚隆道有顯晦治教
之不洽也久矣今也天運循環百度維新且明治教
以宜揚惟神大道也因新命宣教使以而教天下世
群臣聚歎其體斯首

同日

故參議廣澤真臣ノ變ニ遭ヤ 朕既ニ大臣
ヲ保庇スルコト能ハス又其賊ヲ逃逸ス抑維新
ヨリ以來大臣ノ害ニ罹ル者三人ニ及ヘリ是
朕ノ不逮ニレテ 朝憲ノ立タス綱紀ノ肅
ナラサルノ所致 朕甚ク馬ヲ憾ム其天下
ニ令レ嚴ク搜索セシメ賊ヲ必獲ニ期セヨ
辛未二月

國書

澳太利國

日本天皇敬テ澳太利兼洪噶利皇帝陛下ニ復々
朕久陛下之威權赫々美名輝々タルヲ聞ク今陛
下誠信懇篤第三等水師提督特派公使全權ニ
ストルベツク貴族アントン氏ニ命ニ貴書ヲ齎
ラシ来リ以テ和親條約ヲ結ビ委ヌルニ台議調
印之權ヲ以テス 朕素ヨリ深ク望ム所ナ
リ 朕乃チ華族重臣從三位守外務卿清原

朝臣宜嘉及こ從四位守外務大輔藤原朝臣宗則
ヲレヲ貴國全權公使ト快議調印セシム以テ陛
下ノ威意ニ答フ度哉クハ今ヨリ以後兩國ノ際
交誼親厚永ク以テ渝ラサラン丁ヲ更皇帝陛下
ノ健康安寧ナラン丁ヲ祈ル敬テ復ス

明治二年己巳九月 御畫日

御諱 御國璽

奉命右大臣從一位藤原朝臣賢美 花押

西班牙國工

前ニ 朕カ委任全權ノ重臣某々ト西班牙
國ノ全權公使某ト神奈川於而調印セシ左ノ兩
國和親貿易并航海ノ條約是レヲ 大日本
西班牙及佛朗西語ニテ書記シタル箇條二十四
副條一貿易規則六目錄ニ右ニ添タル規則トモ
親ク通覽ヒテ至當トス故ニ天地ト悠久ヲ期シ
テ是ヲ遵守セシ丁ヲ約ス是ヲ證セシカ為
朕カ名ヲ記シ 大日本國ノ印章ヲ鈐ス

明治三年 庚午二月七日 前同例

下秣國

大日本天皇敬テ下秣國皇帝陛下ニ復ス曩ニ我
我慶應二年丙寅十二月ニ方リ始テ貴國ト條約
ヲ締ヒヨリ以來交誼既己ニ深レ今又寵臣シ
ユリクフレデレツキニ命レ貴書
ヲ齎ラシ来テ更ニ懇信ノ意ヲ通セム
朕深ク之ヲ欣ヒ且其陳述スル所ヲ信納セリ自
今以後交誼益深ク懇親弥厚ク兩國ノ盟永ク以
テ渝ラサラシテ冀望ス乃貴書ニ答ヘ併テ貴
國ノ繁盛陛下ノ幸福ヲ祈ル

明治三年庚午八月廿二日

前同

伊太里亞國

大日本天皇敬テ伊太里亞國太皇帝ニ復ス今般
コリントワエデラスデアニ氏ヲシテ特派全權
公使ニ任レ貴書ヲ齎ラシ来ラシム予深ク懇篤
ノ意ヲ領ヒ其告ル所ノ件々固ヨリ之ヲ信ス兩
國ノ交誼益以親昵永久ナラシテ希望レ更ニ
貴國ノ平安幸福ヲ祈ル

明治三年庚午閏十月六日

前同

獨逸國 エ

大日本天皇獨逸國兼宇瀨生國大皇帝ニ復ス今
般獨逸國ノ諸侯伯等大皇帝ノ盛徳ヲ欽仰シ獨
逸國皇帝ノ尊称ヲ加ヘ世々其政權ヲ總ハニ丁
ク乞ヒ大皇帝モ亦衆庶ノ歡心ヲ得テ以テ其職
ヲ盡サンコトヲ勉ムト予之ヲ聞キ欣慶ノ至ニ勝
ハス予固ヨリ大皇帝ノ名望日ニ崇ク政化ノ益
洽ク風俗ノ益美ハヒカラシムコトヲ知レリ庶幾ク
ハ文誼弥深ク懇親弥厚ク兩國ノ盟永ク以テ渝

ラサンコトヲ仍テ貴書ニ答ヘ敬テ祝意ヲ表シ併
テ貴國ノ隆盛ト大皇帝ノ幸福ヲ祈ル

明治四年 辛未三月二十二日 前同

白耳其國 エ

大日本天皇白耳其國大皇帝ニ復ス今般薩臣オ
ーゴスト、フ、キントロ、デンベリキ氏ヲシテ特
派全權公使ニ任シ貴書ヲ齎ラシ来テ懇親ヲ通
心シム予深ク之ヲ欣ヒ其誠篤ノ意ヲ領シ其陳
述ノ言ヲ信ス冀クハ兩國ノ文誼益以親厚永久

テラシラ望ミ且大皇帝及ヒ皇族ノ幸福安寧
ナラシメテ祈ル

明治四年 辛未三月廿七日 前同

為物者記銀指蓋 廿一

音信品物贈答

簿

音信品物
音信

贈答

簿

藥用阿片輸入一件並規則

簿

明治六年

音信品物贈答

明治六年二月廿四日達ス

魯國公使館江之書簡

別紙川村海軍少輔ヨリ之壹封ハ貴國中將ホ

シエツト氏ヨリ御頼ニ付海軍省官員表并艦

船表兵學察規則差贈候趣ニ付ボシエツト氏

ハ御達シ有之度此段及御依頼候敬具

明治六年二月廿四日 外務大臣官本小一

魯西亞國公使館

マレンダ

貴下

明治六年四月十日差出

一英國公使ヨリ之書簡

翻譯文

本國測量船シルヒヤ近年迫戸内測量致候海
圖壹枚龍動府海軍省ヨリ貴國政府工被贈候
ニ付則差進候御落手可有之候敬具

千八百七十三年四月九日 英國公使

ハリエスパルケス

外務少輔

上野景範 閣下

明治六年六月十三日

正院 御中 外務少輔上野景範

特命全權公使澤宣嘉外務卿奉職中去ル康午年
丁抹國ヨリ電信條約取結トシテ御國へ渡来之
全權公使シエリアンチツクヨリ同人へ前約之
趣ニテ子エリし、ユルチヤン酒壹箱別紙書翰添

此節差越候由ニテ所分方伺出候右者受納為
致可然ト存候得共此段相伺候也

明治六年六月十三日

伺之通

明治六年六月十五日

木政木
臣三糸
實美印

印 山口少輔
上野少輔

印大原六等出仕

左局

明治六年十一月二十日

一魯國公使ヨリ之返翰

明治六年十一月十二日附御書翰ヲ外務少丞
平井氏ヨリ直ニ致落手候右致拜閱候處責政
府ヨリ拙者ニ所蒙ノ恩愛ノ奉謝並ニ御書翰
ニ添テ御贈リ被下候御進物拙者ニテ頂戴致
難之譯柄ヲ閣下へ申上候様同氏ニ其節相願
置候

日本ト魯西亞國ハ隣國ニ有之ニ付其兩國間
ノ交際ハ親密ナルヲハ互之利益ニ有之故ニ
閣下御存之通り我政府ハ之類ニ希望致居候
就而ハ右之趣意ニ從テ拙者北京ニ於テ貴國

ノ事務ヲ致辨理候右ニ付拙者ハ魯國名代人
ノ義務ヲ致候間何様ナル褒賞ニ而モ受兼申
候

右ニテ我

皇帝陛下ヨリ祢譽ヲ蒙リ候事並貴國

皇帝陛下へ御謁見ノ時陛下自ラ仁愛ノ御勅

言ヲ賜ハリシ事ハ最モ貴フヘキノ褒賞ト相

成候閣下右ノ事ヲ御勘悟被下候ハ、拙者ハ

貴政府ヨリ何様ノ御進物ヲ頂戴致ス可キ事

御之御同意被下度存候敬具

魯西臣國公使

明治六年十一月二十日

ウラシガリ

外務卿寺島宗則

閣下

明治五年壬申

西曆一千八百七十二年

音信
品物 贈答

申三月九日差出

一英國公使ヨリ之書翰

翻譯文

以手紙致啓上候然者今般備後灘ト播磨灘ト之間之船路海圖壹通三枚本國海軍局ヨリ差越候間同局頼ニ應ニ差進申候御落手可有之候右可

得御意如斯御坐候以上

三月九日

英國代理公使

弟四月十六日

エフオアダムス

副島外務卿

寺島外務大輔

閣下

申三月十日遣ス

一英國公使ハ之返翰

我三月九日附貴簡披見致候然者貴國海軍局ヨリ

之海圖三枚御差越置落掌致候早々其筋ハ相達
可申候間貴國海軍局ハ可然御挨拶可被下候右
回答可得御意如斯御坐候以上

明治五年三月十日

外務大輔寺島宗則

外務卿副島種臣

大貳列顛國代理公使

エフオアダムス

閣下

四月二日

宮内省

外務省

御中

楊逸公便其外ヨリ寫真畫獻上仕度趣ヲ以別紙
 書翰再寫真二個差出シ申候間及御廻候書中申
 越候趣モ有之ニ付御挨拶之儀楊逸公使へ而已
 被遊候間^而可然哉是邊猶評議之上跡ヨリ可申進
 候且畫之横文ヲモ相譯シ候得共右者大略ニテ
 委細ハ未七日同公便拜謁之折可及言上儀与存候
 乃横文之儘及御廻申候間御落手有之度因而別
 紙并畫添此段申入候也

壬申四月二日

申四月

正院

外務省

御中

各國臣民ヨリ進獻品御受納否之儀兼而一定之
 御規則相建置度段 先般相伺置候處佛國寫真
 師ニユマブランヨリ巴里戦争時問之寫真畫進
 獻仕度昔較島少辨務使へ申立此節寫畫^真到着致
 候然ニ前段伺中ニ者候得共進獻之品モ既ニ遠

洋ヲ踰ヘ到着致候儀ニ付今更御拒絶ニ相成候
而ハ彼之懇志モ空ク相成可申ニ付御受納ニ方
可有之致御評議之上可然御沙汰有之度且先
般相伺置候御規則モ次便辨務使ハ心得ニ申達
度ニ付至急御評決ニ相成候様致度此段申進候
也

壬申四月

本文今般之儀者申立候通御受納相成候旨

五月二日

正院

右書者庶務へ相廻候事

明治五年七月起

同 六年

藥用阿片輸入一件 並規則

今般藥用土耳其阿片輸入之為ノ左之通規則相
定ノ候尤モ此規則ハ追而藥品輸入規則相定ノ
候迄取設モノニ右規則相定ムル節者之ヲ改
正變更スル事有ルヘシ

藥用土耳其阿片規則

第一條

吸烟ノ為用ユル阿片ハ何等ノ事故ヲ陳述ス

ルに敷テ之ヲ輸入スルヲ許サス且阿片輸入
禁制ノ条約ハ嚴ニ遵守ス可シ

第二條

藥用土耳其阿片ハ下条ノ規則ニ依リ之ヲ輸
入スルヲ許ス可シ

第三條

藥用土耳其阿片ハ元價一割ヲ取立ツ可シ

第四條

藥用ノ為メ土耳其阿片ヲ輸入スル事ヲ得ル
者ハ何國人ニモセヨ各其國領事館ニ於テ藥

舗トシテ正ニ入籍シタル者ノ内輸入免許ヲ
其處ノ縣廳ヨリ得タル者而已ニ限ルベシ

第五條

其免許ヲ得ント欲スル者ハ國姓名及住所ヲ
明細ニ認シタル願書ヲ府縣廳へ差出シ免許証
書ヲ得ベシ

第六條

此規則ニ從ツテ免許ヲ得タル藥舗ハ藥用ノ
為土耳其阿片何斤何量ヲニヶ月毎ニ輸入ス
ルヲ得可シ

第七條

藥用土耳其阿片ヲ輸入スル藥舗ハ其阿片ノ
高國姓名及住所等ヲ書式通り明細ニ認メタ
ル願書ヲ運上所へ差出シ改テ受テ規則通り
ノ分量ヲ輸入スルヲ得ヘシ

第八條

右之規則ニ從ヒ輸入シタル藥用土耳其阿片
ヲ賣渡スニ必ラス鑿師ナレハ何斤何量ヲ買
フト云フ証書常人ナレハ醫師ノ記名シタル
同断ノ証書ヲ受取リ然ル後テ之ヲ賣渡シ而

シテ其買タル者ノ姓名住所等委曲藥舗ノ賬
簿ニ記載シ置キ一ヶ月毎ニ其買フタル者ヨ
リ受取タル醫師ノ証書ヲ添ヘ一ヶ月ノ賣高
ヲ府縣廳へ届ケ出ツ可シ

第九條

此賬簿ハ何時ニテモ府縣廳ヨリ差遣ス官員
ノ検査ヲ受ク可シ

第十條

賬簿検査ノ時賣拂ノ高ト賣残ノ高ト合算シ
テ其量賣拂タル量ト相違スル歟此規則ニ背

キクル状或ハ何事ニ由ラズ詐偽ノ所為有ル
者ハ其阿片取上ケノ上 百円以上五百圓以下
ノ罰金ヲ為出以後其者ハ阿片輸入ヲ差止
ム可シ

第十一条

藥舗ハ醫師常人ヲ論セス日本人ニ藥用土耳
其阿片ヲ賣渡スヲ禁ス

第十二条

右藥用土耳其阿片輸入ノ免許ヲ或ハ與ハ或
ハ拒ミ或ハ其分量ヲ増減スルノ權ハ都府

縣廳ノ有スル所ニシテ其與拒増減ノ時敢テ
其譯ヲ述ルヲ要セス

書

式

私儀藥用土耳其阿片輸入
賣渡シ致シ度就テハ日本
政府所定ノ藥用土耳其阿
片規則遵守可致候間右免
許御渡シ被下度此段奉願候也

國住可

何某

月日

府縣廳

御中

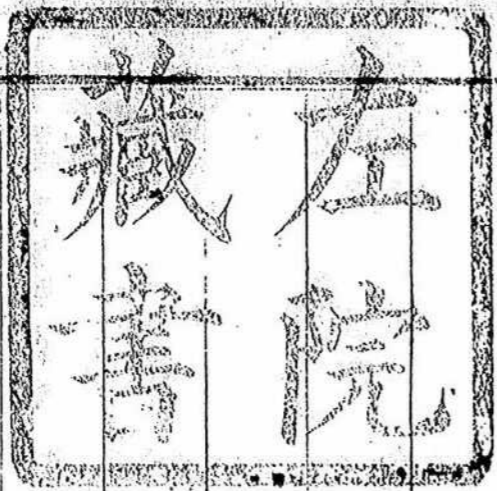
正院

御中

上野外務少輔

藥用鴉片輸入之儀ニ付先般省議具陳致置候處
于今御指令無之候ニ付過日相伺置候通假ニ別
紙規則相設テ各國公使江致書送候ニ付右假規
則差書簡寫トモ差進置申候也

明治六年五月十三日



多分若初海橋奉
廿一

輸入品カメリヤス手袋無税一件
桐油
各港税關上屋規則一件

輸入品

カス手袋
引桐油

無税一件

大

明治五年

壬申西曆千八百七十二年

大

申正月

十二月

兵庫縣

外務省

去十二月十五日附書状ヲ以テ英商ルカスオ

トリス其港輸入之手袋花桐油納税之儀ニ付彼

我監定齟齬致シ候趣ニテ云々御申越之趣委細

承知神奈川縣之取扱方ヲモ尚相糺シ及評議候

處彼申立之趣モ尤ニ相聞且同縣是迄ノ取扱振

五
三

ニテハ右ニ品ノ如キ或ハ品名ヲ不掲難貨又ハ
ハリ久品杯ト申立候事有之其節ニ限リ元價ニ
從ヒ納税為致候義ニテ彼ヨリ強テ論辯イタシ
候節ハ一槩納税為致候理無之ニ付今般被伺候
物品ノ義ハ彼申立通被引渡候方ト存候相稅察
見込ヲモ問合候處同様ニ付此段申入候也

壬申正月十二日

尚以本支桐油之義ハ着用ニ仕立候モノ、
義ニテ若不仕立モノニ候ハ、輸入目錄第
四種之例ニ倣ヒ納税之義申談可然候

未十二月

外務省 御中 兵庫縣

輸入手袋桐油稅銀取立方之義ニ付
相伺候書付

常港在留英國商人ルカスオトリス義手袋貳
箱并桐油四箱陸揚願出候ニ付納税申談ニ候處
條約稅目無稅品類之内外國ノ衣裳但此運上目
録中ニ載セリル品ニ限ルヘシト有之則手袋桐
油等ハ目錄中ニ載セサル品ニ付稅銀難差出段
申立候旨御達之趣ニ有之帽子襟卷手袋等

賣買品ハ見受候ハ聊之品ニテ之決而無税ニ
而ハ難差許段申聞候處英領事同道ニ而四條越強
テ無税輸入イタシ度段申立候ニ付猶種々申談
シ既ニ税則未文一則ニモ輸入目錄ニ載セサル
品ハ輸出目錄ニ載ル事アリトモ是ニ隨而税ヲ
納ムヘカラス元代ニ隨テ税ヲ納ムヘシト有之
則元代ニ隨テ税ヲ可納品々有之元來税館ハ輸
出入賣買品ハ無相違品ヲ無税ニテ可差許趣意
無之殊ニ桐油ハ無論之義之旨論破ヲヨク候得
共何カ領事聞入不申尤右荷物ハ運上所ニ預リ

置候處其後何等之義ニ不由出再ニ税銀相納荷
物引取可申旨申達候而之今以其儘ニ致シ置候
因而勤勞仕候處定而旨等之次第公候ニ申立候
義ニ之可存之裁ト存候ニ付其旨御倉萬一申出
候義ニ候ハハ可然御引合被下全所持之衣服等
ニ屬シ候品ハ格別其他賣買之品ハ無税ニ而ハ
一切難差許段御引合御坐候様仕度可相成ハ被
レ先ニシ當方ヨリ御申込被下右邊之義確定
イクシ候様仕度此段申上候以上

享保
十二月十五日

神奈川縣ニ於テ無稅納稅取扱來候書
御寫右者各港ニ御達ニ相成候事
衣裳之内無稅差許來候品

一 筒袍上着

一 上股引

一 合羽

一 胴着

一 巾着子

各之種ア、刀、子、口、頭、ハ、金、巾、之、類、ニ、方、製、シ、候、下、
緞、刺、其、外、都、方、衣、類、ニ、仕、立、候、之、ク、同、商、品、品、稅、
仕、承、候、分、

一 足袋

一 半袋

一 仕丹

一 帶

一 襟卷

一 掛襟

一 襟飾

各港税関上屋規則一件

明治五年
同 六年

税関上屋ノ規則

第一條

上屋ニ假入シタル貨物ノ引渡シ時間ハ日曜及
ニ式日ヲ除クノ外日出ヨリ日没ヲ限リトス

第二條

第九條ノ物品ヲ除クノ外上屋ニ假入スル貨物
ハ總テ倉庫料ノ指示セシ場所ニ差置ク可シ尤
二十四時^{二層}夜ヲ限リトス

第三條

前條二十四時以後ハ荷主又ハ引請人倉庫料ノ
許可ヲ得其貨物ヲ仮庫ニ移入シ猶四十八時^{三夜}
間之ヲ差置^一妨ケ無シ但シ此時限中ハ庫租ヲ
收ムルニ及スト雖モ若シ其貨物災害ニ罹ル^一
有ラハ荷主又ハ引請人ノ損失タル可シ

第四條

第二律ノ如ク二十四時間ニ上屋ヨリ引取ラカ
貨物ハ税関長官^三條ノ如ク之ヲ假庫ニ移納ス
可シ尤其雜貨ハ勿論貨物ノ損害等ハ荷主又ハ

引請人ノ引請ケトス但此時限以後ノ取扱ハ

第五條ノ如シ

第五條

第三條ノ如ク四十八時間ニ假庫ヨリ引取ラカ
ル貨物ハ税関長官更ニ借庫ニ輸送シ其規則ニ
照應シ以テ之ヲ貯蔵ス可シ但シ此雜費モ亦荷
主又ハ引請人ヨリ差出ス^一當然タリ

第六條

當港ニ陸揚ケセシ後七十二時^{三夜}間引取ルモノ
無キ貨物ハ税関長官之ヲ無請求品ノ倉庫ニ移

細シ一年間貯蔵ス可シ其雜費或ハ損害ノ如
クハ總テ荷主スハ引請人ノ引請ケトス但シ此
ノ期限ヲ超ル時ハ則明治二年己巳正月十九日
一月ハ百六十
元年三月一日 頒行シタル借庫規則第十四條ノ如
ク取扱フ可シ

第七條

貨物陸揚以後七十二時間ハ日本政府敢テ其守
衛ヲ為ササルニ非スト雖モ之ヲ借庫ニ貯蔵ス
ルニ非ルヨリハ堅固保護スルヲ能ハス

第八條

天氣或ハ視閔長官ノ命ス可キ事故有リテ實ニ
第三條ノ如ク上層ヨリ引取リ難キ貨物ハ其時
限ヲ繰フス可シト雖モ決シテ借庫ニ貯蔵スル
ニ時ヨリ長ク差置テテ許サス

第九條

借庫規則第十八條ニ掲載シタル物品ハ一切上
屋或ハ假庫ニ入ルルヲ許サス此品類ヲ陸揚
ケスル時ハ速ニ之ヲ引取ル可シ

第十條

前條ノ物品荷主又ハ引請人其引取リヲ怠ルト

ハ税關長官之ヲ海濱又ハ海上安全ナル揚所
智管スルヲ得可シ此運貨及ヒ貯藏ノ費用
飯今高直ニ當ルハ之荷主又ハ引請人之ヲ償
ハ可ルヲ得ス

第十一條

切ノ貨物税關境内路上ニ差置リ可ラズ馬或
ハ車ノ如キモ亦其往來ヲ塞リヲ許サズ

第十二條

税關又ハ上屋又ハ借庫ノ内ニ於テ吹烟スルヲ
嚴禁タリ

第十三條

税關境内ニ於テ軍艦又ハ亂暴ヲ為スモノハ時實
ニテ之ヲ取押ヘ其領事ニ引渡ス可シ
右規則ノ條々ハ明治五年壬申八月十一日
ヨリ取行フモノ也

横濱運上所

一千八百七十二
年七月十四日

多額政府の以て採集
十三

在院

布哇條約

簿

藏

米穀輸出一件

簿

澳地利條約一件簿

自明治三年庚午二月十九日
至明治四年辛未十月廿一日
西曆一千八百七十一年三月廿日
西曆一千八百七十一年五月三日

布哇條約

大日本國
布哇國 條約書

大日本國

天皇陛下卜布哇諸島

皇帝陛下兩國ノ間ニ親睦之交際ヲ起サシ事ヲ

欲シ兩國利益之為ノ條約ヲ結ハシコトヲ決定

シ大日本國

天皇陛下ハ大臣從三位守外務卿清原朝臣宣嘉

大臣從四位外務大輔藤原朝臣宗則ヲ其全權ニ

條ニ布哇諸島ノ

皇帝陛下ハ大臣子ヤルレヌ、イ、デロンゾヲ

大日本國

天皇陛下政府ノ下ニ在ル特派全權公使ニ任シ
雙方互ニ其委任状ヲ示シ其情實順正適當タル
ヲ察シ以テ尤之條々ヲ同意決定セリ

第一條

大日本國

天皇陛下ト布哇諸島

皇帝陛下各其後嗣差兩國人民之間ニ永久之平

和無窮之親睦アルヘシ

第二條

爰ニ條約ヲ結ハル兩國之臣民ハ他國之臣民ト
交易スルヲ許セル總テノ場所諸港及ヒ河々ニ
其船船及ヒ荷物ヲ以テ自由安全ニ来リ得ヘシ故
ニ兩國之臣民右諸港諸地ニ止リ且住居ヲ占メ
家屋土藏ヲ借用シ又之ヲ領スル事妨ケナク諸
種ノ產物製造物商買之法令ニ違背セザル商物
ヲ貿易シ他國之臣民ニ已ニ許セシ或ハ此後許
サントスル別段之免許ハ何レノ處ニテモ他國

ハ一般ニ許容スルミヨリハ兩國ノ臣民ニモ同様
推及スベシ尤爰ニ條約ヲ結ハル兩國ノ領内ニ
テ事業ヲ營ミ或ハ居留スル他國之臣民ヨリ取
立ツヘキ租税ハ常ニ拂フヘシ

第三條

爰ニ條約ヲ結ハル兩國若シ然ルヘキト思ハバ
千プロマ千ツクエゼントヲ命シ兩國政府之首
府ニ在留セシムヘシ又コンシユル或ハコンシユル、エゼントヲ
命シ國中ニテ他國臣民ト貿易スル事ヲ許セル
諸港或ハ諸場所ニ居留セシムヘシ右兩國之ニ

シユル或ハコンシユルエゼントハ他ノ最モ懇親ナル國之
同位^階階ヲ有セルエゼント之令現ニ得タル公理
別段之免除自由之殊典ヲ得ヘシ或ハ此後得ヘ
キモノモ亦然リトス

第四條

大日本國
天皇陛下ヨリ他國或ハ臣民ニ免許シ或ハ向後
免許スベキ諸事ハ布哇政府及ヒ其臣民ニモ同
様ニ之ヲ推及スベキコトヲ茲ニ約セリ

第五條

布哇人ハ日本人ヲ雇ヒ是ヲ法度ニ於テ禁セサ
ル諸用ニ給スル事日本政府ニ於テ之ヲ妨サ
ルヘシ

第六條

外國人雇置ク日本人開港場知事ニ願出レハ海
外行ノ印章ヲ得ベシ

第七條

爰ニ條約ヲ結ヘル兩國此條約之趣ヲ實地經驗
之上何レノ方ニテモ不都合ノ虞アルヲ知ラハ
六ヶ月前ニ報知シ雙方協議ノ上改定スヘシ

第八條

此條約ハ大日本國

天皇陛下ト布哇諸島ノ

皇帝陛下互ニ確證シ本書ハ東京ニ於テ此條約
ト同日ニ取替セリ又此條約ノ趣ハ右本書取替
ノ日ヨリ直ニ施行スヘシ

右證據トシテ大日本明治四年辛未七月四日西
曆千八百七十一年第八月十八日東京ニ於テ雙
方之全權此條約ニ名ヲ記シ印ヲ調スルモノ也

從三位守外務卿清原朝臣宣嘉印
從四位守外務大輔藤原朝臣宗則印
キヤルレス、イ、デロニグ 印

今般朕力委任全權之重臣ト布哇國大皇帝ノ特
汎全權公使ト會議シ取結セタル大日本國ト布
哇國和親貿易ノ條款親シク通覽シテ至當トス
故ニ悠遠無窮之ヲ遵守セラルヲ約スコレヲ定
證センカ為朕力名ヲ記シ大日本國ノ印章ヲ鈴
ス

明治四年辛未七月四日

御 譯

奉 右大臣從一位藤原實美花押

米穀輸出一件

明治六年庚辰

細 上野少輔

兩

宣下 大正
舊四年出仕

隆田 三年出仕
長山 七年出仕

左 奇

明治六年七月十九日

各國公使領事之書翰

別紙簿二百四十六號布告之通米麥輸出差許
候間即有布告一葉相添此段及御報知候敬具

明治六年七月十九日

外務少輔上野景範

米布 英 仙魯蘭

獨 丁 西 瑞典 奧

各公使姓名 閣下

同文

明治六年七月十九日 外務大丞宮寺小一

白 瑞西 葡

各領事姓名 貴下

訂 上野 文甫

訂 益田 四三

三司

明治六年十一月廿四日 達

各國公使之書翰

以書翰致啓上候 奏者先般米麥輸出之義 蓋許候
麥多度米麥絲已同孫差許候 旨別紙等三百八十
左號ヲ以及而皆候 閣石布告文一葉差進申候 此
既可得貴貴此候 敬矣

明治六年十一月廿四日 外務卿寺島宗則

英 佛 澳 米 葡 獨 伊 蘭 魯

丁 西班

各公使姓名閣下

同文言

明治六年十一月廿四日

外務省巴等出仕鹽田三郎

瑞西 白露 布哇 白耳義

各領事姓名貴下

澳地利條約一件

自明治二年己巳西曆一千八百六十九年

至同 四年辛未同 一千八百七十一年

外務省於之條約此致延邊館之於之為取替之證書

一千八百六十九年第十月十八日之締約也之澳地

利洪葛利之日本上(日本上澳地利洪葛利上)之和

親貿易航海條約之書之比較也之為人左之記名

之日本條約本日本外務省之參會之致命之上其相

違之日本條約之有之卷之各別之包裝之各包之其

外務卿副島種臣外務大輔寺島宗則ハ日帝天皇
陛下ノ全權トシテ澳地利皇帝兼洪葛利アポ
トリック皇帝陛下ノ全權ハカリスヨリ澳地利
皇帝兼洪葛利アポトリック皇帝陛下親證條
約本書ヲ請取辦理公使ハカリスハ澳地利皇帝
兼洪葛利アポトリック皇帝陛下ノ全權トシ
テ日帝天皇陛下親證條約本書ヲ全權外務卿副
島種臣外務大輔寺島宗則ヨリ受取之ヲ證スル
タメ其事ヲ記セル此書面ニ記名ニ調印スルモ
ノ也

千八百七十一年第一月十三日

東京ニ於テ

外務卿副島種臣

ヘニリツセ